



## 野球

初試合は大正8年



昭和初期のOKクラブ

置戸における大正時代の社会体育としては、体育施設やスポーツ用具のない時代なので、かけっこ、相撲、川泳ぎが手っ取り早い競技でした。

とりわけ野球はモダンでハイカラなスポーツと言われていました。置戸での歴史は案外古く、初試合が行われた大正8年、当時は審判が一人で、投手の後ろに立ってストライク、ボールの判定を宣告し、走者へのタッチも一人で確認してアウト、セーフを告げるといった時代でした。

置戸野球界の開祖で、戦後長い間野球連盟会長を歴任した中村浜市氏の話によると、この頃はグローブが7～8円、スパイク8円、バット2円、皮ボールが5個で米一俵という時代でしたから、稼ぎ人などは簡単に手を染められませんでした。小樽で野球の虜となった中村氏は、同6年置戸に移り住んで野球の朋友を集めました。幸い置戸小学校には鉄腕高木投手がおり、女房役の佐々木捕手がありました。また岡崎多三郎氏が良き理解者となり監督を引き受けてくれました。チーム名はO

Kクラブでした。網走、野付牛、遠軽、本別と試合を重ね、よく善戦して「OKクラブ強し」を印象づけたのでした。

その後、村内にも学校や貯木場などの職場チームができ、時折置戸小学校グラウンドで対抗戦が行われ、学校でも体育の時間に取り入れられるようになりましたが、太平洋戦争に入ってから国民学校令の公布によって従来の教科が再編成され、体育関係は体操、武道を中心とした体練科となり、野球は道具のないこともあって敬遠されました。たまたま野球が取り入れられても「ストライク」「ボール」「アウト」などの“鬼畜米英語”は使用禁止で、ストライクが「良球」、セーフが「良し」などと宣せられたため違和感がありました。また、野球を応用した柔らかいゴムボール使用の三角ベースが流行、これはグローブがなくても素手で捕れ、バットもいらないので子どもたちの遊びとして普及していきました。

(参照：置戸町史上巻)

## 失敗を恐れずチャレンジする姿勢を

### 『五体不満足』乙武さん記念講演

自身の体験をもとに挑戦することの素晴らしさを語る乙武さん



ベストセラー『五体不満足』の著者として知られる乙武洋匡さんの講演会が10月28日、置戸中学校で開かれました。講演会は、同中校舎の耐震化・大規模改修工事の完成記念として開かれ、会場には同中生徒をはじめ町民ら約480人が詰めかけました。

乙武さんは、ベストセラー作家からスポーツライター、キャスター、そして教育分野へと活動の場を広げていますが、この日はその姿勢を表すように「チャレンジ精神を忘れずに！」と題した講演が行われました。

この中で、乙武さんは3年間の小学校教員時代、プールに顔をつけられない児童に「先生は5メートル泳いでみせる、と約束してプールでもがく姿を見せたところ、その児童は少しずつ泳ぐ練習を始めた」と話し、「子どもばかりでなく大人もチャレンジする姿勢を示そう」と訴えていました。